

化石研究会会誌50周年特集号の刊行に当たって

化石研究会 会長 神谷英利

化石研究会は1959年11月に設立され、昨年2009年に50周年を迎え、「創設50周年記念総会」を開催し、創設以来の活動のまとめとも言える学術討論会、記念祝賀会を行った。この「化石研究会会誌」特集号は、この記念総会で行われた学術討論会「シンポジウム 化石研究会における研究活動の成果」において発表された講演をもとに新たに執筆された総説や論文をまとめたものである。

1959年5月に地学団体研究会の第13回総会で行われた進化論のシンポジウムが開催され、それをきっかけとして、新しい古生物学を目指す研究者が「石灰化」と言う研究テーマのもとに集まって、同年11月に設立した研究組織が化石研究会であるとされている。

日本では主に地質学分野に依拠してきた古生物学分野だけでなく、動植物学、菌学、水産学、生化学など、従来は化石の研究とはあまり縁がないように思われていた分野の研究者も加わった。会の目的は研究を進めることであり、(1)古生態学、(2)化石の微細構造、(3)古生物学的進化論の3つを活動の大きな柱とした。化石研の発祥と深い関係のある地団研が、創造活動を柱としながら、同時に普及や条件作りの活動も行う、いわゆる三位一体の活動方針であったのに対し、化石研は目的を研究だけにしぼったのが大きな特徴であった。初期の会則を見ると「会の目的は研究であり、普及活動をはじめ、研究以外の活動は行いません」とある。

化石研の会員の研究条件は決して良いものではなかったが、古生物学の近代化を目指す会員の努力と古生物学の境界領域の研究成果の習得と交流が積極的に進められた。化石として多く産出する貝（軟体動物）やサンゴ、菌や骨など生物の硬組織（石灰化組織）の微細構造とその形成機構の解明、またそれら硬組織に含まれるアミノ酸などの有機物の研究にあたっては、水産学、生化学、菌学などの研究機関に「内地留学」などの形で手法や成果の習得を行った。化石試料にかかわらず、現生の試料も古生物学的な視点から研究することが普通となり、境界分野の研究者との討論が非常に重要なものとなっていった。また、古生態学の分野でも、現生の動物学・生態学の成果を取り入れながら、団体研究も含めた研究活動が進められた。

これらの研究の成果は次第に蓄積され、1977年には

第3回国際生体鉱物研究集会 The 3rd International Symposium on Biomineralization（賢島シンポジウム）を日本で開催するまでになった。この国際学会の開催に当たっては、化石研の会員が主要な役割をつとめ、若い院生会員たちは自分たちの研究成果を世界各国からの参加者に直接ぶつける機会を得て、集会の裏方として準備にたずさわりながら、自分の研究発表のための英文原稿の修正に追われた。日本で開催された国際学会ではあるが、多くの第1線の海外の研究者の研究成果に直接触れ、かつ準備・運営の過程で多数の外国の研究者と交流できたことは、若い研究者にとって大変なプラスであり、自信となった。

このような国際的な取り組みはその後化石研が率先して取り組んできたところであり、1990年には第6回（小田原）、2001年には第8回（新潟）の国際生体鉱物研究集会と、昨年に第11回を迎えたこの国際研究集会のうちの3回を日本で開催する上で大きな力となっていった。同時にドイツ、アメリカ、オランダ、モナコ、チリ、中国など、日本以外の国で開催された集会にも会員が積極的に参加し、成果の発表と研究交流を進めてきた。

今回の創設50周年にあたり、運営委員会は約2年前に記念行事を行うことを提起し、その準備を進めてきた。会員からはいろいろなご提案をいただいたが、結局、①記念総会と学術討論会の開催、②記念祝賀会の開催、③今までの会の活動をもとにした「記念出版」の3つを実施することとなった。また、これらの事業を円滑に推進する一助として、会員の皆さんに広く募金をお願いすることとし、多くの方からご協力をいただいた。

記念総会は2009年6月13日から14日の2日間、横浜市鶴見区の鶴見大学第1講堂および菌学部で開催された。開会の挨拶に続き、これまで会の活動に貢献された会員への感謝状の贈呈が行われ、大森昌衛、（渡部哲光）、糸魚川淳二、赤木三郎、秋山雅彦、（柴田松太郎）、小林巖雄、（長谷川美行）、（堀口萬吉）、（小野寺信吾）、木村方一、真野勝友の12名の会員（カッコ内は欠席）に感謝状と記念品が贈られた。引き続き、大森昌衛会員と秋山雅彦会員により「化石研創設の頃と歩み」についての話を伺った。また、かつていろいろと境界領域でお世話になった和田浩爾（水産学・真珠

の研究), 都留信也 (地球微生物学), 佐々木哲 (歯学・生化学) の諸先生, さらに Dr. Martin A. Whyte (英・シェフィールド大学) から50周年に対する祝賀メッセージをいただいた。

記念シンポジウムは「化石研究会における研究活動の成果」として行い, (1)「化石の形態学的研究と古生態の研究」, (2)「化石の微細構造の研究」, (3)「進化・進化論の研究」の3領域について, 今までの研究の成果と最新の研究の現状について, 合計13の講演がされた。本号に掲載されている論説はその際の講演に基づいて執筆されたものである。

シンポジウムとは別に, 会員の研究を紹介する「ポスター展示」も行われ, 11件の参加があった。さらに, 歯学部解剖実習室においては, いろいろな骨格標本や化石, 化石研の歩みにかかわる資料など, 日頃はなかなか見る機会の少ない貴重な物の展示会が催され

た。

2日間にわたる記念総会には80名の参加があり, 会員総数が200名ほどの本会としては大変な盛会であった。多くの研究発表と活発な討論があり, 創設50周年の区切りとして企画された記念総会は, 十分な成果を上げる事が出来たと言えよう。ここにその成果をまとめた本号を刊行できるのは, 大変喜ばしいことであり, 執筆者をはじめ, 編集委員会さらに今までの活動に参加された諸兄姉に感謝申し上げる。また, 化石研の創設以来, 研究の発展と会の運営に尽力された, 今は故人となられた先輩諸氏にあらためて心からの謝意を表するものである。

最後になったが, 50周年記念総会の会場を提供され, その運営に当たられた, 鶴見大学の後藤仁敏, 小寺春人両会員に深謝の意を表する次第である。